

契約妻のはずが

豹変した夫の激愛に浸されています

三月初旬。

株式会社不動旅行企画のオフィスビル内の社員食堂で、それは起きた。

「浮気は滅びろ、不倫は地獄行き」

物騒な発言と共に正面に、だん！ とトレイが乱暴に置かれる。その衝撃でうどんを啜<sup>すす</sup>っていた野木春華は「けほっ」とむせた。

危ない。咳をするタイミングがあと少しでもずれていたら、人が大勢集まる社員食堂で鼻からうどん、なんて残念すぎる姿を晒<sup>さら</sup>すところだった。

「急にどうしたの、香？」

なんとか呼吸を整えた春華は戸惑いながら正面を見る。そこには、全身に不機嫌オーラを纏<sup>まと</sup>う同期兼友人の新里香<sup>にいさと</sup>がいた。食器トレイに春華と同じうどんを載せた香は、対面に座るなり眉間に皺<sup>しわ</sup>を寄せて睨<sup>にら</sup>んでくる。

(え、怖い)

本当にどうしたというのだろう。いつも朗らかな笑顔を絶やさない友人が見せた険しい表情に戸

惑っていると、香はゆつくりと口を開いた。

「……たの」

「なんて？」

「だから、浮気されたの」

テーブルは違えど周囲には他に社員もいるからか、その声はとても小さい。けれど、地面を這うような低い声は彼女の怒りをこれ以上なく表していた。春華もまた、『浮気』の一言にピクリと眉を動かす。

「今の彼氏とは、結婚を前提に付き合ってるって言ってたわよね？」

香は悔しそうに唇を引き結び、無言で頷いた。

香の恋人は、広告代理店勤務の二歳年上の男だったはず。一年前にマッチングアプリで知り合い、最近『そろそろ結婚に向けて同棲を考えてるんだ』と報告を受けた。そのときの香は同性の春華から見てとても可愛らしくて、『結婚が決まったらお祝いさせてね』と気が早い返事をしたばかりだった。

（それなのに、浮気ですって？）

ふざけるな、いったいどういうことだ、問い詰めてやる——一気に怒りの感情が湧き上がり、自然と顔が険しくなる。香もそれに気づいたようだ。

「春華」

「何」

「私がするならともかく、どうしてあんたがそんなに怖い顔してるの？」

「大切な友人が馬鹿にされたんだから、怒るのは自然なことだよ」

きっぱり言い切る。とある事情から学生時代をぼつちで過ごした春華にとって、香はかけがえない友人だ。そんな彼女が無下に扱われたのに怒らないわけがない。

その思いは相手にも伝わったのか、香は一瞬間食らったように目を瞬かせた後、苦笑する。

「ありがと。そう言ってくれると少し救われるわ」

小さくため息をつき、香はことの次第を話し始めた。

「……会社の後輩と二股されてたの。しかも、それが発覚したのはついさっき」

「どういうこと？」

「浮気相手宛のメッセージを私に送ってきたのよ。『週末の温泉旅行、楽しみにしてる！』って浮かれた文章をね」

「ありえない」

春華はたまらず吐き捨てた。そのときの香の心情を想像しただけで胸が痛くなる。

「本当、ありえないわよね。ダサいのが、すぐに送信取り消しをしたのよ。まあ、速攻スクショを撮ったから意味はないんだけど。電話をして問い詰めたら、あっさり浮気を白状したわ。『出来心だ』って言ってたけど——」

「信じちゃダメよ、そんな言葉。香がいるのに他の女性と関係を持つなんて最低。そんな男に、香はもったいないわ。ブロック一択」

春華は最後まで聞くことなく切り捨てたが、すぐにしまったと我に返る。友人の彼氏を『最低』呼ばわりは、言葉が過ぎたかもしれない。でも、香には申し訳ないが、考えるより先に口をついて出てしまったのだ。

さすがに、滅びろ、地獄に行け——とまでは思わないけれど、春華も浮気は絶対に許せないと思っている。たとえ友人の話であっても自分ごとを感じるほどに、不貞行為に対する嫌悪感は強い。「ごめんね、言いすぎたかも」

「全然！」

謝罪すると香は首を横に振った。春華が怒りを見せたことでいくらか落ち着いたのかもしれない。香はわずかに肩の力を抜き、大きなため息をついて箸に手を伸ばす。

（よかった、食欲はあるみたい）

内心ホッとしつつ、春華もまた食事を再開する。

「結構好きだったんだけどなあ。あー、しんど」

「早退なくて大丈夫？」

浮気も失恋も未経験の春華にはわからないが、今の香は結婚を考えていた恋人に裏切られた直後。仕事どころではないのでは、と心配になるが、香は真顔で「早退なんてありえない」と答える。

「最低男が原因で、貴重な午後休を使いたくないもん。意地でも休まない」  
きっぱりと言い切る姿は、春華の目にとっても魅力的に映った。

「香ならすぐに新しい恋人ができるわよ。男の人はその人だけじゃないし」

「今まで一度も彼氏がいたことがない春華に言われてもね」

「うっ……それは、そうだけど」

慰めたつもりがまさかの反撃をくらってしまふ。でも、事実だけに何も言い返せなかった。

現在二十四歳の春華は、学生時代も含めて一度も異性との交際経験がない。一方、香は恋多き女性だ。彼女とは約二年の付き合いになるが、香に恋人がいなかった期間はほとんどない。『恋愛経験』という点において、春華は友人の足元にも及ばないのだ。

「でも、お世辞じゃないわ。香は可愛いから、付き合いたいと思う人はたくさんいるわよ」

交際経験がないのは事実だが、その言葉に嘘はない。そう伝えようと、香はクスリと笑う。

「わかっている。意地悪言ってごめんね、冗談よ。ありがとう、春華」

くりっとした目を細めた香は、淡いピンクのルージュを引いた唇をふわりと綻ほころはせる。

（あ、可愛い）

明るい茶色の髪を肩のあたりでふんわりと巻いた香は、「モテ女」の見本のような容姿をしている。身長は百五十八センチ。華奢なまめながらも胸は大きく、実に女性らしい体つきが魅力的だ。

（香の半分でいいから、私にもこの可愛さがあればいいのに）

春華は髪を一度も染めたことがないし、腰まで伸びた黒のストレートロングはいつも簡単にひとつにまとめている。身長は百七十センチと女性にしては高めだ。

しかも、子どもの頃から脂肪のつきにくい体質のせいか、香のようなまるやかさはほとんどない。そのくせ胸だけは大きいのがかえってアンバランスで、思春期にはかなり気にしていた。

顔立ちも綺麗と言われることはあるが、きつい印象を与えがちなキリツとした眉や猫目は、自分ではあまり好きではない。見た目という点で言えば、香とは何もかもが正反対だ。

「でも、それを言うなら、春華と付き合いたい男こそたくさんいると思うけど」

矛先を向けられた春華は小さく肩をすくめる。

「まさか。そんな物好きな人いないわよ。それに私は今のところ恋愛する気はないし」

「またそんなこと言つて。結局、春華みたいな清楚系が一番モテるのよ。しかも、あんたの場合は本物のお嬢様だし」

「それは……」

「野木製菓<sup>のぎせい</sup>なんて、誰でも一度は名前を聞いたことがあるような大企業だもの。ご両親も立派な方なんですよ。ただのサラリーマン家系のうちとは違うわ」

「そんなことないわよ」

春華は曖昧<sup>あいまい</sup>な笑顔で受け流した。これ以上、実家の話題を広げたくなかったのだ。

春華の父は会社を経営しているし、その会社が国内でも有数の食品会社なのは事実である。父は経営者としては優秀なのだろう。でも父親としては違う、と春華は心の中で香の言葉を否定した。

（不倫するような人を尊敬なんてできない）

父が母以外の女性と関係を持ったのは、春華が十歳のときだった。父曰く不倫をしたのはそのときだけらしいが、その一度の不貞行為で春華の家庭はあつけなく壊れた。

夫の裏切りを許せなかった母は父を責め、家庭に居場所がなくなった父は仕事に逃げた。

それから今日までの間、春華は一度も一家団欒<sup>だんらん</sup>というものをしたことがない。

そんな家庭環境で育った春華にとって浮気は絶対悪。先ほど香の恋人を『最低』と言ってしまった理由もここにあった。『異性関係にだらしない男』はそれだけで恋愛対象外だ。

たとえ、相手が非の打ち所がないほど完璧な男だったとしても。

「あっ！」

不意に香が声を上げた。

「見て、不動副社長<sup>ふどう</sup>よ」

香は、興奮気味に輝かせた目を春華の後方に向けたまま、小さく感嘆の息をつく。けれど春華はそちらを見ることはしなかった。

「香、早く食べないとうどんが伸びるわよ」

伸び切った麺ほど残念なものはない。しかし、香は何を言っているんだと言わんばかりに顔を顰<sup>しか</sup>めた。

「うどんよりも不動副社長でしょ？」

「私は不動副社長よりうどんなかな」

そう答えて、春華は最後に残った麺<sup>すず</sup>を噉<sup>く</sup>る。やっぱりうちの社食のうどんは美味<sup>おい</sup>しい。

箸を置いた香は呆れたように小さく肩をすくめ、再び春華の後方に視線を戻した。

「いつ見ても素敵ねえ。目の保養になるわ」

ついさっきまで浮気されたと嘆いていたのにえらい変わりようだ。でも、凹んでいるよりずっと

いい。春華が安堵と呆れの両方を感じていると、香はニコリと笑顔を見せた。

「春華もたまにはイケメン成分を摂取した方がいいわよ。じゃないとあつという間に枯れるから」  
「イケメン成分って」

ある程度共感しないとこの話題は終わらないかもしれない。仕方なく春華が振り向けば、同様に同じ方向を見つめる女性社員がたくさんいることに気づいた。その視線が集まる先ではふたりの男性が食事をしている。

副社長の不動聡と、彼の専属秘書を務める木梨修吾だ。

そして、聡こそが女性社員の色めき立つ原因だった。その主な理由は三つある。

まずは、経歴。

春華と香の勤める不動産旅行企画は、国内でも有数の大手旅行会社である。聡はその名からもわかる通り、創業者一族にして現社長のひとり息子。年齢は二十九歳と若いものの、いずれは父の後を継ぐことが決定している、いわば生粋の御曹司である。

だが、聡は名ばかりの後継者ではなかった。豊富な留学経験を持つ彼は、マルチリンガルで、日本の最高学府を卒業した後不動産旅行企画に入社し、数々の実績を打ち立て二年前に副社長に就任したやり手でもあるのだ。

次に、容姿。

聡は百八十五センチの高身長で、日本人離れたスタイルの持ち主だ。すらりと伸びた長い手足に引き締まった体は、外国人モデルが撮影用のスーツを着ていると言われた方がしっくりくるほど

だった。

その上、顔が抜群にいい。艶のある黒髪。キリッとした眉に切れ長の瞳。高く通った鼻筋や形のよい唇。美形という言葉がここまで似合う人は、そうそういないだろう。

そんな容姿端麗な彼は、社内の女性陣からアイドルのような扱いを受けている。

『遠くの推しより近くの推し』というのはそのうちのひとりである香の言だ。実物が間近で見られて、運が良ければ会話もできる。そんな不動聡は理想的な推しの相手なのだとか。

(言いたいことは理解できるけど、共感できないのよね)

そんな感情が表情に出ていたのか、香は春華をちらりと見て再び小さく肩をすくめた。

「春華くらいじゃない？ 不動副社長に興味がないの」

「目立つ人だな、とは思っわよ」

「もう、そうじゃなくて。『かつこいいな』とか『素敵だな』とか思わないの？ それとも総務部にいるから見慣れてるとか？」

「そんなことないわ」

春華は苦笑して首を横に振る。

社長や副社長などの役員と接点があるのは秘書課だ。同じ総務部でも春華は人事課所属。どちらも同じフロアにあるが、秘書課と人事課は端と端に位置している。加えて専務以上の役員には専用の執務室があるから、春華のような一般社員が彼らと直接やりとりすることは皆無に等しい。

「接点のなさで言ったら他の部署と変わらないわよ」

言いながら心の中で付け足す。

「確かに「顔だけ」は文句なしにいいと思うけど」

もちろん口には出さない。そんなことしたら色めき立つ他の女性社員にどんな目を向けられるか、想像するだけで冷や汗ものだ。

女性陣が聡に見惚れるのは理解できるが、人の好みはそれぞれ。外見に重きを置く人もいれば、内面を重視する人もいる。春華の場合は圧倒的に後者だ。

「私は、いくら見た目がよくてお金持ちでも、女性関係にだらしない人は好みじゃないわ」  
春華の言葉に、香は「確かに」と苦笑する。

「不動副社長、結婚したのに相変わらずいろんところで噂が立ってるものね」  
「そういうこと」

聡が有名である最後の理由。それは女性関係の華やかさだ。

社内で圧倒的人気を誇る彼は、実は既婚者だ。その証拠に左手の薬指には結婚指輪が常に嵌められている。それにもかかわらず、彼には女性関係の噂が常にあった。相手は取引先の令嬢だとか芸能関係者だとか言われているが、誰かは明確になったことはない。

とはいえ、噂が絶えないということは事実無根というわけでもないのだろう。学生時代はかなり派手に遊んでいたというし、あのルックスだ。浮気のひとつやふたつしていても不思議ではない。

「あーあ、副社長が既婚者じゃなければなあ」

香の呟きに、春華は悪戯っぽく唇の端を上げた。

「狙ってた？」

「まさか」

香はすぐに否定する。

「私にとって副社長はあくまで推しよ。遠くできーきー言ってる分には楽しいけど、自分と……だなんて考えたこともないわ。恋人にするなら断然、木梨さんだもん」

香は聡の向かいに座る眼鏡の男性、木梨の名前を挙げる。

木梨は聡とは違ったタイプのイケメンだ。真面目で穏やかそうな風貌の彼は、香曰く「リアコ」枠らしい。香とは同じ大学の出身で、インターンシップでも世話になったのだと聞いている。

「私も、どちらかといえば木梨さんの方がタイプかも」

「ダメよ、木梨さんは私のものだから」

「そうなの？」

「そうなればいいなっていう願望。でも、彼氏とは別れるつもりだし、本気で狙ってみようかな」  
何かと噂の絶えない聡が相手なら反対したかもしれないが、木梨なら安心だ。

「頑張つて。応援してるわ」

そんな雑談をしながらふたりは昼食を終えた。ここからは午後の仕事が始まる。

春華は総務部へ、香は経理部へ戻らねばならない。

年度末を目前に控えた今ほどの部署も慌ただしい。人事を担当している春華も、来月には新入社員との関わりがグンと増える。

午後も頑張ろうと互いをねぎらいながらふたりは席を立った。そして食堂を出ていく道すがら、春華は何とはなしに聡の方を見てハツとした。

聡と目が合ったのだ。しかも、ただ視線が合っただけではない。聡は不機嫌そうに春華を睨んでいるように見えた。

(気のせい?)

それにしてもまっすぐこちらに鋭い視線を向けていた。とはいえ足を止めるわけにもいかず、春華は動揺したまま出口へと向かう。だから気づかなかった。

「副社長？」

「……いや、なんでもない」

木梨に呼ばれた聡が、春華の後ろ姿を実に苦々しい表情で見つめていたことに。

その日の午後六時過ぎ。仕事を終えた春華はデスクトップパソコンの電源を切り、席を立った。まだ残っている他の社員に挨拶をしてフロアを出ると、自然と肩の力が抜ける。しかし、それはどこか心地のよい疲労感だ。

来月の四月になれば、春華は社会人三年目に突入する。四月二十日の誕生日で二十五歳を迎えたら、晴れてアラサーの仲間入りだ。

(二年間、あつという間だったなあ)

会社を出た春華は人目も憚らず大きく伸びをした。

現在所属している人事課では、主に採用の仕事を担当している。まだまだ経験不足だが、二年目になって後輩もでき、今のところは充実した社会人生活を送っていた。

——自ら稼いで給料を得る。それをもとに自活する。

多くの人にとっては自然なその行為が、春華は今でもときどき特別に感じる瞬間がある。

春華は昔から人一倍『自立したい』という気持ちが強かった。けれど、学生時代にアルバイトをすることは許されなかった。

だからだろうか。働くことができる現状が嬉しくて仕方ないのだ。

(香には引かれちゃったけど)

この話をした際、『信じられない』『社畜?』と目を丸くした友人の反応は記憶に新しい。

香は“労働＝自己時間を充実させるための代価”と捉えている。“充実＝仕事”な春華とはある意味、真逆の価値観だ。もちろん、人によって当然異なるものなので、おかしいこととは思わない。でも、春華がその価値観にいたった理由を友人に話すことは、多分この先もないだろう。

「野木さん！」

駅に向かって歩いていた春華は、後方からかけられた声に足を止めた。

振り返ると、ひとりの男性がこちらに向かって走ってくるのが見えた。同じ人事課に所属する一年後輩の岡崎<sup>おかざき</sup>紇斗だ。

「よかった、間に合った！」

春華の目の前に到着した岡崎はニコツと笑う。しかし、春華は笑えなかった。こんなにも全力



ダッシュで追いかけてくるなんて只事ただことではないと思ったのだ。

「どうしたの、そんなに急いで。会社で何かあった？」

即座に頭の中でやり残した仕事がないかを振り返るが、何も浮かばない。

「違いますよ。野木さんが見えたから走ってきただけです。せつかくですし、一緒に帰りませんか？」

「それはいいけど、何かかと思っただわ」

「すみません、つい」

隣に並んだ岡崎が頬を緩める。それに拍子抜けした春華は苦笑し、共に駅に向かって歩き始めた。岡崎は春華にとって初めての後輩だ。黒髪に焦茶色の瞳をした彼は、学生時代はサッカーに打ち込んでいた根っからのスポーツマンで、部署の中でも可愛がられている。明るい性格で、どこか大型犬を思わせる愛嬌のある男性だ。

年齢が近いこともあってか、岡崎は何かと春華を慕ってくれる。

「この後に予定がないなら、飯でも食いに行きませんか？」

「私と岡崎君のふたりで？」

「はい」

さて、どうしたものか。別にこれはデートの誘いではなく、同僚から食事に誘われたただけ。ふたりに夕食を共にすることにはなんの問題もないのだけれど――

「あつ、もしかして同居人と一緒に食べる約束でもしてました？」

就職をきっかけに実家を出た春華が知人とルームシェアを始めて、もうすぐ二年になる。それを

知った上での質問だろうが、答えは『ノー』だ。同居人とは決して不仲ではないが、それでも夕食を共にしたことは数えられる程度だった。

それをどう説明しようかと、ためらっていたそのとき。

「あつ！」

突然、岡崎が声を上げた。その視線は通りの向こう側に向いている。

何かかと思いつつ同じ方向を見た春華は、目に飛び込んできた光景に『なるほど』と心の中で納得する。

「あれ、不動副社長ですよ？」

「……そうね」

あんなにも目立つ男を見間違えるはずもない。

通りを挟んだ対角線上にいたのは、不動聡。その隣には柔らかなベージュのパンツスーツを着た女性が立っていた。聡より頭ひとつ分以上背が低く、小柄だ。遠目にもわかるほど可愛い顔立ちのその女性は、聡を見上げて微笑んでいる。

親密な雰囲気ふんいきを漂ただよわせながらふたりは停車していたタクシーに乗り込むと、夜の街へと消えていった。時間にして十数秒にもかかわらず、映画のワンシーンのようだった。

「うわー、貴重なもの見ちゃったかも。あれって噂の奥さんですかね？」

遠ざかる車を見送りながら岡崎がやや興奮うき気味に呟つぶやく。

「奥さんではないと思うわよ」

岡崎とは対照的に春華は冷静に答えた。

聡が既婚者なのは有名な話だが、その相手が誰かまでは知られていない。一部ではあえて隠しているのではないかと……とも噂されている。そんな相手と堂々とデートはしないだろう。

そう見解を述べると岡崎は「確かに」と頷いた。

「それじゃあ恋人かな。結婚してるから、浮気相手とか？」

「さあ、どうかしら」

「でも、既婚者なのに他の女性とデートって普通に不倫ですよ。やっぱり副社長の噂は本当だったかあ。でもあれだけイケメンなら仕方な——」

「岡崎君」

なおも聡の話題を続けようとする岡崎を遮り、春華は声を上げた。

「やっぱり今日、ご飯に行く？」

「えっ!? いいんですか!」

「お酒は飲まないけど、それでもよければ」

「全然いいです!」

意気込んだ岡崎は「すぐに店を決めますから!」と言って、スマートフォンで店を検索し始める。その様子を春華は微笑ましく思いながら見つめた。プライベートでは会社の人間と関わりたくない人は多くなっていると言われている中、春華と食事に行くだけでこうも喜ぶなんて可愛い後輩だと思う。春華はひとりっ子だが、弟がいたらこんな感じなのかもしれない。

「じゃあこの店でいいですか? □コミの評価も高いし」

「ええ」

ものの数分で店は決まり、春華と岡崎は近くにある居酒屋に向かう。

明るくノリのいい後輩と過ごすのは純粋に楽しかった。ビールのジョッキを傾けながら、岡崎が尋ねる。

「そういえば結局、同居人の方は大丈夫でしたか? 俺は野木さんと食事に来られて嬉しいですけど」

「大丈夫よ。さっきは言わなかったけど、基本的には食事は別々だから。今日も外で済ませてくると思うし」

春華の答えに岡崎は目を瞬かせた。

「随分あっさりしてるんですね」

「そう? こんなものだと思うけど」

「そっか。まあ、同居と同棲は違うか」

ポツリと岡崎は呟いた。

「野木さんみたいな感じならうまくいったのかなあ。いや、俺、大学生の頃に彼女と同棲したことがあるんですけど、住み始めてすぐにダメになったんですよ」

大学時代に恋人と同棲。大学と実家の行き来で四年間が終わった春華には、あまりに縁遠い話だ。「最初是一緒にいられて嬉しかったのに、時間が経つにつれてストレスばかりが溜まっちゃって。」

そういうことありません？」

春華は自身の同居生活を振り返りながら、口を開いた。

「ストレスは別に溜まらない……かな。同居と言ってもそれぞれの部屋は別にあるし、お互い必要以上に干渉しないようにしているから」

「そうか、部屋数があれば違うのか。それに野木さんの同居人は女性ですもんね。俺は1DKだったし、喧嘩けんかしたが最後、逃げ場がなかったんですよ」

「ずっと同じ部屋なのは大変かもね」

そんなやりとりを交わしつつ、一時間ほどで店を後にした。ちなみに今日の食事代は春華が持った。会社の後輩にお金は出させられない。

「ごちそうさまでした。でも、次は俺が出しますからね」

「ふふっ、次があったらね」

「え、もうないんですか？」

大袈裟に肩を落とす仕草がおかしくて、春華が「冗談よ」と返せば、岡崎は「よかった」と小さく息を吐いた。

「野木さんの機嫌も直ったようだし」

意外な言葉に、春華は駅に向かう足をぴたりと止める。

「私、不機嫌そうに見えた？」

楽しく食事をしていたつもりだったが、岡崎には違って見えたのだろうか。そうだとしたら申し

訳ないことをしたな……と反省していると、岡崎は「そうじゃなくて」と首を横に振る。

「店に行く前……不動副社長が女性と一緒にいるのを見たとき、なんとなく怒ってるように感じました。もしかしたら野木さん、副社長が気になってるのかなって——」

「まさか」

即座に否定する。思いの他強い口調になってしまったが、これだけはきちんと伝えておかなければ。

聡が誰とどこで何をしていようと春華にはまったく関係ない。お盛んね、とは思うがそれだけだ。「副社長がモテルのは有名な話だし、そもそも私が気にすることじゃないもの」

春華の答えに、岡崎は「それもそうですね」と安心したような顔をする。

「変なことを言ってますみません」

そんなやりとりをしていると、やがて会社の最寄り駅に到着した。

「それじゃあ、また来週」

「ええ、お疲れさま」

岡崎と別れた春華は電車に乗り込みドアの近くに立つと、車窓越しに過ぎゆく都会の街並みを見つめた。

（今週も頑張ったなあ）

所狭しと建ち並ぶビル群、目がチカチカするほど派手な電飾の看板、駅に停車するたびに忙せわしく乗り降りする乗客。

きつと多くの人にとっては見慣れた、なんてことない光景。しかし、春華にとっては違う。今でこそ当たり前のように電車通勤をしているが、就職する前はほとんど電車に乗ることがなかった。最初のうちなんて、朝の満員電車で何度窒息しそうになったことか。

(あれには今でも慣れないけど)

夏場は汗や香水など色々な匂いが車内に充満するので、かなりしんどいときもある。それでも春華は嫌だと感じたことはなかった。むしろ電車通勤できることに喜びすら感じている。

それから十五分ほど電車で揺られて降車し、春華は改札を抜けた。しかし、駅の外に出る必要はない。なぜなら春華の自宅マンションは駅に直結しているからだ。おかげで天気は左右されることなくまっすぐ帰宅できる。

「おかえりなさいませ」

エントランスキーを解除してマンションのロビーに入ると、コンシェルジュの男性が迎えてくれた。春華は小さく会釈をし、自室へと向かう。

ここは、都心に聳<sup>そび</sup>える地上四十階建ての高層マンション。その高層階の一室が春華の自宅だ。そこに行くには、専用のカードキーをエレベーターに繋<sup>つな</sup>ぐ必要がある。

交通アクセスは抜群でセキュリティもばっちり。さらには周囲の環境も申し分ない。

マンションの中には住民専用のジムやプールが併設されていて、敷地内にはスーパーマーケットやドラッグストア、病院などが入る複合施設も存在する。その他にカフェや書店なども充実していて、生活するには十分すぎる環境が整っていた。

当然だが、その分賃料は高い。いかに春華が大企業勤めとはいえ、二十四歳のいち会社員が住めるような場所ではない。それにもかかわらず春華がここに住めているのは、同居人の所有物件だからだった。さて、その同居人は帰っているだろうか――

「ただいま」

玄関のドアを開けるが、返事はない。靴もないし、やはりまだ帰宅していないようだ。

大理石が敷き詰められた玄関でパンプスを脱いだ春華は、手洗いなどを済ませると、いったん自分の部屋に入り荷物を置いた。八畳の部屋に三畳のウォークインクローゼットがついたこの部屋が、春華のプライベート空間だ。ちなみに他の個室は、同居人の寝室、書斎、ゲストルームもある。

この部屋の金額を春華は知らないが、都心の一等地に聳<sup>そび</sup>える高級タワーマンションで4LDKとなれば数億円は下らないだろう。それを所有する同居人はやはりただものではないなと思いつながら、春華はバスルームに向かった。

事前にアプリでお湯を溜めておいたおかげで、すぐに湯船に浸かれるのはありがたい。お気に入りの入浴剤を入れて四肢を伸ばすと、一週間の疲れがお湯に溶けていくような気がした。

「はあ。生き返る……」

解放感からため息が漏れる。今日の出来事を振り返っていると、ふと同期と後輩の言葉が頭に浮かんだ。

『もう、そうじゃなくて。「かつこいいな」とか「素敵だな」とか思わないの?』

『もしかしたら野木さん、副社長が気になってるのかなって――』

不動聡に興味がないのか。

その問いに対して、春華は『興味がない』と返した。確かに文句なしの美形だと思うし、女性にモテるのも当然だと思う。だがそもその話、浮気性の男は春華の恋愛対象外だ。

「……誠実なのが一番よ」

一途さに勝るものはないと春華は考えている。

(ろくに恋愛をしたこともないのに、何言ってるんだって感じだけど)

温まった後は、体を拭いて部屋着に着替える。そうして鏡に映るのは、上下三千円のグレーのスウェットを着て、髪の毛を適当にくくった自分だ。バスルームのラグジュアリーな雰囲気にはまるで似合っていない。

(こんなところ、お母さんには見せられないな)

見られたが最後、母は激怒するか、下手したら絶叫しかねない。その姿がありありと想像できるだけに、春華はこのゆるゆるのスウェットを着られる今の生活が心地よくてたまらないのだ。

(さて、と。この後はどうしよう)

金曜日の夜ほど心躍る日はないのだと、春華は社会人になって初めて知った。

平日は控えているお酒を飲みながら、気になっていた映画を見るもよし。お菓子を手に先日まとめ買いた漫画をスマホで読むもよし。どうせならアイスを食べてしまおうか。お風呂にも入ったし、最悪リビングで寝落ちしたところでそれを咎める人は誰もいない。

せいぜい翌朝、鏡に映る浮腫んだ顔にショックを受けるくらいだろう。でも、明日が休みなら閑

係ない。

(決めた！ 今日はお酒とお菓子と映画にしよう！)

春華はリビングに戻り、うきうきとアイスとお菓子を用意する。そしてL字形のソファに座ると、大型テレビの向こうに都内の夜景が一望できた。東京タワーとスカイツリーが同時に見られるのだから、つくづく贅沢な空間だと思う。

そうしてルンルン気分でお菓子の袋を開けようとしたそのとき、遠くで玄関が開く音がした。どうやら同居人が帰ってきたようだ。

(えっ、今日は遅いんじゃないの？)

特に連絡が来ていたわけではないが、てっきり帰ってくるのは日付が変わってからだと思っていた。春華が突然の帰宅に動揺していると、すぐにリビングのドアが開かれる。

「あ……おかえりなさい」

「ただいま」

仏頂面で答えたのは、同居人こと不動聡だった。

“不動聡の妻は、総務部人事課の野木春華である”

このことを社内で見知っているのはごく一部の社員だけ。当事者の他には、義父の不動社長と聡の腹心の部下である木梨修吾、そして春華の上司の総務部長だ。

当然、香や岡崎は知らないし、この先も知らせるつもりはない。

なぜなら春華と聡がしたのはただの結婚ではない。

春華は実家を出て自由を手に入れるため。

聡は「既婚者」という社会的ステータスを得ることで煩わしい見合い話を避け、仕事に専念するため。

それぞれの目的のために「結婚」という名の契約をした、いわば仮面夫婦なのだ。

実際、夫婦になってもうすぐ丸二年になるが、ふたりの間に男女の触れ合いは一切ない。当然、寝室は別々だ。基本的には食事も別々だし、家事も互いに適当にやっている。

唯一、年に一度の結婚記念日だけはデートをすることになっているが、それさえも結婚という契約を更新するか否かを決めるための場ではない。

よって、ふたりは戸籍上は夫婦であるものの、友人でもなければ恋人でもなかった。

あえてこの関係に名前をつけるなら、「同居人」が一番しっくりくる。だから『彼氏はいない』と香に言った言葉に嘘はない。ただ、『夫がいる』というだけで。

聡とのビジネスライクな関係は比較的うまくいっていたし、特に喧嘩などもしたことはない。喧嘩するほど深い話をしたことがない、と言った方が正しいのかもしれないけれど。

「お仕事、お疲れさまでした」

聡は、最後に見たときと同じネイビーのスーツ姿だった。

春華はそれが既製品ではなくオーダーメイド品であると知っている。なぜならあのスーツは、昨年の結婚記念日に春華が聡へプレゼントしたものなのだから。

「今日は早いですね」

仕事、プライベート共に多忙を極める聡と家で顔を合わせることは稀だ。

金曜日の夜、しかも日付が変わる前に帰ってくることは滅多にない。今日だって小柄な美女とデートをしていたのだから、朝帰りになるだろうと思っていた。

だからこそ春華はそう言ったのだけれど、聡は「ああ」とぶつきらぼうに答えるだけだった。

（何？）

気のせいだろうか。今の聡は見るからに不機嫌そう。ソファでくつろぐ春華を見て無言で眉間に皺を寄せるのは、妻の怠惰な姿が許せないからだろうか。

（でも、そんなの今さらだろうし……）

聡は春華のよれよれスウェット姿なんて見慣れているはず。それに、天下の不動旅行企画副社長はそこまで心は狭くない。となると、小柄美女に振られたとか？

「聡さん、何かありましたか？」

「どうして」

「どうして、って……」

質問に質問で返されて内心戸惑う。これから華金タイムを楽しもうと思っていたので、面倒な話ならあまり聞きたくない。しかし、こちらから切り出した手前放っておくこともできず、春華は口を開いた。

「機嫌が悪そうなので」

聡はこれには何も答えなかった。無言でこちらに向かってくると、そのままずっと春華の隣に腰を下ろす。同時にふわりと甘い香りが漂<sup>たふ</sup>ってきて、春華はつい顔を顰<sup>しか</sup>めた。聡の愛用する香水とはまるで違う香りは、おそらくあの小柄美女のものだろう。

『基本的に婚姻期間中の不貞行為は禁止』

契約上は一応そうなっているが、それが守られているかは定かではない。なぜなら、今日のように聡から女性の気配を感じるのには珍しくないからだ。とはいえはつきりとした証拠はないし、匂わせ程度なので春華は見えぬふりをしてきた。

自分が聡と男女の行為をする気がない以上、口を出すのは憚<sup>はば</sup>られたし、今のところ何か迷惑を被<sup>こう</sup>っているわけではない。極論、結婚生活が続けられるのであれば、書類上の夫がどこで誰と何をしようと春華には関係のない話だ。けれど、自分が贈ったスーツから他の女性の香りがするのは、あまり気持ちのいいものではない。

「眉間に皺<sup>しわ</sup>が寄つてますよ」

「面白くないことがあつたからな」

だからそれが何かと聞いているのだけれど。

（やっぱり彼女に振られちゃった？）

それとも何か別の嫌なことでもあつたのか。どちらでもかまわないが、八つ当たりや面倒ごとはやめてほしい。内心そんなことを思っていると、拗ねたような顔をした聡に睨<sup>にら</sup>まれた。

「春華は、木梨みたいな男がタイプなんだって？」

「はい？」

目を丸くする春華に、聡は陰のある声で続ける。

「昼間、社食で話していたそうじゃないか。木梨が新里さんから聞いたと言っていた」

「新里って、香から？」

「ああ。新里さんは俺と木梨と同じ大学出身だろ。俺は個人的な付き合いはないが、木梨は何かと接点があるらしい。今日木梨と飲んでいるときに、『春華ちゃん俺は俺の方がタイプみたいだ。悪かったね』って自慢された。何が『春華ちゃん』だ、馴れ馴れしい」

部下への愚痴をこぼす夫の姿に春華はボカンとした。つまりは、なんだ。

（私の言葉を聞いて、木梨さんに負けた気がして不機嫌になつてること？）

嫌な予感を感じていたが、本当に面倒な話だった。

何事かと身構えていた春華は一気に脱力した。目の前の缶チューハイに手を伸ばしたい気持ちをグツと堪<sup>こら</sup>えて、ため息をつく。

「別に、そんなのどうでもいいじゃないですか」

投げやりな春華の態度に、聡はますます眉間の皺<sup>しわ</sup>を深くした。せつかくの美形が台無しだ。そんなことを春華が思っているとは露<sup>あらわ</sup>れども知らない聡は真顔で詰め寄る。

「どうでもよくない。他の男ならともかく、木梨と比べられて黙<sup>もく</sup>っていられるか。しかも、俺よりあいつの方がいいとかありえない」

「いつものライバル意識ですか？」

「そんなところだ」

聡と木梨は副社長と副社長秘書という立場だが、プライベートでは高校・大学時代の同級生で、親友だというのは春華も知っている。ふたりは学生時代からのライバルでもあり、しかも昔から木梨の方がモテていたということも。聡からそれを聞いたとき、春華はそれはそうだろうと思った。パツと見の華やかさなら聡に軍配が上がるが、木梨はそんな彼に負けず劣らず整った顔をしているし、加えて穏やかで紳士的な雰囲気を持ち主なのだからモテないわけがない。

でも、それを馬鹿正直に聡に話すことはしない。

(これ以上の面倒ごとはごめんだわ)

しかし、春華の表情から内心が透けて見えたのだろう。聡はいつそう不機嫌そうに顔を顰める。

「春華」

「えっ!？」

聡が突然、両手で春華の肩をがっしり掴んだ。さらには顔をグツと近づけてくるものだから、春華は小さく悲鳴を上げた。

「な、なんですか?」

「いいか、よく聞け」

腹に響くような低い声に一気に心臓が跳ね上がるが、これは断じてときめいたわけではない。聡ほどの美形が眼前に迫れば誰だつてこうなるはずだ。

そう誰に対してでもなく心の中で言い訳をする春華に、聡は言った。

「木梨は人畜無害そうな顔をしているが、本当はものすごく腹黒い男だ。だから悪いことは言わない、木梨だけはやめておけ。な?」

続けて聡は「世の中にはもっとまともな男はたくさんいる」「男は顔が全てじゃない」と的外れなアドバイスをしてくる。

それを春華は呆氣に取られながら聞いていた。

(どこから突っ込めばいいの……?)

大前提として、春華は別に木梨が好きなのではない。聡とどちらがタイプかと問われて、ただ誠実そうな木梨を選んだだけだ。それなのに聡は真面目な顔で「木梨はダメだ」と重ねて訴えてくる。そのあまりに必死な様子に面倒臭さを一瞬忘れて、春華は問うた。

「もしかして、嫉妬ですか?」

「は?」

これに今度は聡の方が目を丸くした。鳩が豆鉄砲をくらったような間の抜けた顔を見て、春華は噴き出しそうになるのをなんとか堪える。

聡は数秒間固まった後、何を言っているんだと言わんばかりに片眉を上げた。

「嫉妬? 俺が?」

「はい」

「まさか、ありえない」

一蹴される。まがりなりにも妻相手になんて態度だ……とは思わない。



「ですよ。そうだと思います」

聡が春華を女として見ていないのはわかっている。それにもかかわらずこうも彼がこだわるのは、単に木梨に負けたのが悔しいからだ。それ以上でもそれ以下でもない。

それはいいとして、今の春華には何よりも気になることがあった。

——近いのだ。

聡の両手はいまだ春華の肩に置かれたまま。さらには、彼の吐息が唇に触れるほど顔が間近にある。体勢だけを見ればキスを迫られているようだ。それだけではない。

「……お酒と香水の匂いがします」

一度はスルーしたもののやはり気になって、春華は指摘した。直後、聡はバツと身を引き立ち上がる。両手を上げて、彼は「悪い」と気まずそうに謝罪した。

「マナー違反だったし、近すぎた。肩も強く掴んでしまったかもしれない。痛かったか？」

春華は首を横に振る。正直に言えば少しじんじんするが、酔っ払い相手に文句を言っても意味はない。だから問題ないと答えたのだけれど、聡はまた面白くなさそうな顔をする。

(なんなの?)

今日の彼は少し情緒不安定なように見える。ビジネスライクな夫婦関係といえど、二年も一緒にいれば多少の心の機微は見取れる。

「やっぱり振られたんですか？」

「振られたって、誰に」

「今日、デートだったんですよ。女性と一緒にタクシーに乗るところを見ました」

この指摘に、聡は一転してばつの悪そうな顔をする。

「……彼女はただの仕事相手だ。付き合いで飲みに行っただけでデートじゃないし、恋人じゃないから振られようもない」

意外だった。とても親密そうな雰囲気だったし、男女の関係なのかと思っていた。

「信じてないな？」

疑わしそうに問われて春華は反応に困る。

「飲みの席には木梨もいた。やましいことは何もないし、なんなら木梨に確認してくれてもいい」

「いえ、別に大丈夫です」

そこまで興味がないので、とは言わない。これ以上ややこしくなるのは避けたかった。自分はこの映画とお酒の華金タイムを満喫したいのだ。

とにかくこの妙な雰囲気を変えたくて、春華はあえて明るい口調で問いかける。

「そうだ、聡さんもよかったら一緒に映画を見ますか？ 恋愛映画なので、興味があるかはわかりませんが」

本当はひとりでダラダラするつもりだったが仕方ない。

立ったままでは疲れるだろうと思い、春華は自分の隣をポンポンと叩く。しかし、聡はそこに腰を下ろすことなく、<sup>しか</sup>めつ面<sup>おもて</sup>でため息をついた。

「……いい。風呂に入って寝る」

「そうですか」

やった、おひとりさま時間ゲット！ という心の声をグッと呑み込む。自室にはテレビもパソコンもあるが、どうせ見るならリビングの大型テレビで堪能したいのだ。

そうと決まったら早速……と嬉々としてリモコンに手を伸ばす。しかし、それを聡に止められた。「なあ、春華。その部屋着、そろそろ買い替えないのか？」

聡の視線は上下三千円のゆるゆるスウェットに向けられている。今さらなぜそんなことを言われるのかわからない。これはもう一年以上着ているし、彼も見慣れているはずなのに。

「別に、まだ着られますけど……」

困惑する春華をよそに彼は続けた。

「でも、だいぶくたびれてるし、色も地味だし。もっと明るい色の方が春華には似合うよ。せっかく綺麗な顔をしてるのにもつたいない」

「え？」

「別に好きでそれを着てるならかまわないけど、新しくする気があるなら変えたらどうだ？」

「なんで、そんな——」

「春華は可愛いんだから、あえて枯れた格好をする必要もないだろ？」

綺麗。可愛い。さりとて続けに言われたそれらに、春華は言葉を失った。

聡がこうもはつきり春華を褒めることは滅多にない。もちろんけなすこともないが、彼は常に春華に“女性”ではなく“同居人”として接している。それなのにこんなことを言うなんて、聡はよ

ほど酔っているようだ。

所詮は酔いの上での戯言。そう、わかっているのに。

「なんだ、急に赤くなって。もしかして照れてる？」

ふっと微笑む夫の姿に、春華は自分の頬が赤くなっているのを感じた。

「ち、違います」

「可愛い」

誰かこの酔っ払いをなんとかしてほしい。

（女たらし、色気の暴力！）

名ばかりの妻を口説くなんてどういうつもりか。否、聡にそんな気はないのだろう。その証拠に彼の形の良い唇の端はニヤリと上がっている。要は、からかっているのだ。

「そうだ、どうせなら俺とお揃いにするか？ プレゼントするよ」

「お断りします。だいたい、聡さんしか見ないのに、ちゃんとした部屋着を着ても仕方ないでしょ」  
苦し紛れに口をついて出たのは、可愛げの欠片もない反論だった。

「ま、それもそうだな」

聡はあっさり答えてリビングを出ていく。ボタン、とドアが閉まり、足音が遠ざかるのを確認した春華は脱力してソファの上に横になった。そのままクッションを抱き抱えて顔を埋める。

「……なんなのよ、もう」

突然褒められて情緒が追いつかない。なんとか気分を変えたくて映画を再生するが、ものの十分

と経たずにテレビを消した。まったく集中できないのだ。

仕方なくテーブルの上に置いたお菓子とお酒を片付け、早々にリビングを後にする。だが、今日の春華はつくづくタイミンクに恵まれなかった。自室に向かう途中の廊下で、風呂上がりの聡とばったり会ってしまったのだ。

「あれ、もう寝るのか？」

話しかけられたが、春華は返事ができなかった。

（なんで裸なの!?）

ズボンこそはいているものの、聡は上半身裸だった。太く引き締まった二の腕や盛り上がった胸筋、六つに割れた腹筋。一切無駄のない肉体美に思わず目を奪われる。

「春華？」

「な……んでもありません！ おやすみなさい、もう寝ます！」

「おい、ちょっと待っ——」

最後まで聞くことなく春華は自室に逃げ込み、そのままベッドにダイブした。

きつく<sup>まぶた</sup>瞼を閉じるが、先ほどの光景が目には焼き付いて離れない。勝手に胸の鼓動が速まって痛いほどだった。こんなところ、とても香や岡崎には見せられない。

彼らに『副社長に興味はない』と言った言葉は本当だ。香にも話した通り、春華のタイプは一途な男であって遊び人ではないのだ。その点、聡は圧倒的に後者である。

結婚してもうすぐ二年。形式上の妻になってからも、春華の耳には夫の華やかな女性関係の噂が

飛び込んできた。だからそれなりに遊んでいるのだろうと思っていたけれど、それに対して抗議したことは一度もない。嫉妬なんて論外だ。

一方、春華はプライベートではなるべく異性とふたりきりにならないようにしている。もちろん自分なりのケジメとしてそうしているだけで、聡から言われたわけではない。

ただ、これまで噂は聞いていても、今日のように決定的な瞬間を見たのは実は初めてだったりする。一応既婚者なので、聡もそのあたりのラインは越えないよう気をつけていたのかもしれない。だから正直なところかなり驚いた。

悩んでいた岡崎の食事の誘いをついOKする程度には動揺したし、少し……ほんの少しだけイラッとした。要は、面白くなかったのだ。

（でも、これは嫉妬じゃないわ）

絶対——多分、きつと、驚いたただけだ。だって、今の春華は聡に恋しているわけではない。

週終わりという疲労が蓄積されたタイミンクで、初めての光景を目撃して混乱したのだろう。こういうときはさっさと眠ってしまうに限る。

おひとりさまを満喫できなかったのは残念だが、諦めよう。

春華は無理やり気持ちを切り替えると、部屋の照明を落として<sup>まぶた</sup>瞼を閉じた。

いつになく聡との接触が多かったからだろうか。その夜、春華は懐かしい夢を見た。初めて恋をし、敗れた、甘く苦いひと夏の思い出。そして、再び出会った日の夢を。

その年の夏は、近年稀に見る異常気象だったと記憶している。

日本各地で連日四十度を超え、「九月に入っても猛暑は続くだろう」というニュースを聞いたとき、春華は心の底からうんざりした。

夏休みに入ると学校は一月間以上も休みになる。これといって出かける予定があるわけでもないが、暑いという事実だけでげんなりするというものだ。

「……夏休みなんて早く終わればいいのに」

自室のベッドに横たわり、春華はひとりごちた。今頃、クラスメイトは大いに夏を満喫しているのだろう。臉を閉じれば、夏休み前の浮かれた女子の声が蘇ってきた。

七月に入ると、教室の中では自然と夏休みの過ごし方が話題になる。春華の通う高校は都内でも屈指のお嬢様学校として有名で、出てくる話題はいずれも華やかなものばかりだ。

耳にした行き先だけでも、軽井沢、ハワイ、ウイーン、ニース……と様々だった。しかし、春華が彼女たちの会話に加わることはなかった。旅行話に花を咲かせるクラスメイトの声が耳に入っただけ。

何せ、春華には友人がいないのだ。

だから夏休みが一日でも早く終わってほしい理由は、クラスメイトに会いたいからではない。

この家に……母と一緒にいたくないからだった。

父は国内外に別荘を所有しているから、その気になれば春華はいくらでも避暑地に行ける。けれど、春華が行く場所には必ず母がついてくるのだ。

“ひとりになりたい”

“母から離れたい”

結局のところ、その願いを叶えられる場所は実家の自室しかなかった。

(夏休みの間、ずっとお母さんと一緒なんてうんざりする)

春華の母・野木華は、過剰なほどに娘に干渉する性格だった。娘の習い事、進学先、果ては友人関係まで全てを自分の監視下に置きたがっていた。

それを春華は今日まで受け入れてきた。本当は嫌でたまらなかったけれど、母が執拗なまでに自分に執着する理由も、そうなった過程も身にしみて知っているから。

(……お父さんさえ馬鹿なことをしなければ)

春華が十歳のとき、父の野木渉は不倫した。そして、酒に酔って起こした一夜限りの過ちを母は決して許さなかった。

母は名家の生まれで、幼い頃から蝶よ花よと育てられた生粋のお嬢様。両親が結ばれた経緯は、母に一目惚れした父があの手この手で口説き落とすからだと言われていた。

幼い頃の両親は、ときに見ているこちらが恥ずかしくなるほど仲の良い夫婦だった。妻をお姫様のように扱う父と、夫に全幅の信頼を置く母。仲睦まじいふたりは春華の憧れで、自分もいつか結

婚するなら両親のようになりたいと思ったほどだ。

実際、母もよくそのようなことを言っていた。

『お父さんは私がいなくちゃダメなの』

『春華も、結婚するならお父さんみたいに奥さんを大切にする人を選ぶのよ』

父について語る母は、娘から見てもとても綺麗だった。愛されている女性というのは内側からも輝くことを、幼心に知った瞬間でもある。

だからこそ、父の不倫を知ったとき、春華は世界が終わってしまったような絶望感に襲われた。でも、母の衝撃はその比ではなかった。

夫に愛され続けた母にとって、父の裏切りはとても受け入れ難いものだったのだと思う。

母は空気が震えるほどの大声で父を責め、視界に入ったありとあらゆるものを父に向かって投げつけた。壁に掛けられた絵画は落下し、窓ガラスは何枚も割れた。母が大切にしていたアンティークの食器も粉々に砕け、リビングに飾られていたたくさんの家族写真は床へと落ちた。

それらを目の当たりにしながら、春華は家族が……家庭が壊れる音を確かに聞いた。

人が変わったように暴れる母を、父も春華も止めることができなかった。

『信じていたのに！』

嵐が過ぎ去ったように突然静かになった母は、次いで床に膝をつき泣き叫んだ。

『あなたなんて大嫌い！ 夫としても、父親としても失格よ！』

『裏切り者！』

『離婚なんて絶対にしせんから……！』

そうして母は心と体を病んで入院した。数か月の入院生活の後、家に戻ってきた母は春華の知る母ではなかった。母は、徹底的に父を“いないもの”として扱ったのだ。

父が話しかけても無視を貫き、見向きもしない。最初のうちはあの手この手で妻に振り向いてもらおうとしていた父も、やがて諦めてほとんど家に帰ってこなくなった。

一方で、母は過度なまでに春華に執着するようになった。

当時の春華は其学の私立小学校に通っていたが、なかば無理やり女子校に転校させられたのだ。そこは幼稚舎から大学まである一貫校で、母の母校でもあった。

『もうお母さんには春華しかいないの。春華までダメな人間にならないように、お母さんがよく見ていないといけないわ。わかるでしょう？』

友達と別れるのが嫌だと春華は拒んだが、鬼気迫る母にそう詰め寄られては断り切れなかった。もし、また母が以前のように暴れたらと思うと怖かったのだ。

学校への送迎は当たり前。季節外れの転校生でなかなかクラスに馴染めない中、ようやく友人ができて、母が認めてくれなければそこで終わり。

『うちの子とはあまり関わらないでね』

母は友人に容赦なくそう言い放った。

門限なんて必要なかった。平日は学校と家の往復だけ。習い事には必ず母が同行し、週末もどこに行くにも母が一緒。スマートフォンのGPS機能は常にオンで、母がチェックする。

中学に進学してもそれは変わらなかった。

いじめられこそしなかったものの、友人なんてできるはずもない。春華が仲良くなりたいと思う子がいても、母が迷惑をかけたらと思うと勇気が出なかった。

一度、過干渉な母に耐えきれずに父に相談したことがある。でも、無駄だった。

『……お母さんは春華の事を思っているんだ。受け入れてやりなさい』

不倫以降、ほとんど家に寄り付かなくなった父が母を窘めることはなかった。

多分、妻に対する負い目があったからだろう。最も、仮に父が母を注意したところで空気として扱われるだけだっただろうけれど。

結果的に、春華は特に親しい友人がいまま高校生になった。

これまで、何度も抵抗しようと思った。それでも我慢してきたのは、不倫された母が可哀想だと思ったから。その上、娘の自分まで母を拒絶したらどうなってしまうのか……そう思うと怖くて反抗できなかったのだ。

おかげで華の女子高生となった今も、親しい友人のひとりもない。

真っ昼間にもかかわらずベッドの上でごろごろしている自分の怠惰さは、自覚している。

出かけるのは習い事のときくらいで、しかも運転手の送迎付きだから、実質外に出ているのは車の乗り降りだけ。帰宅しても、食事と風呂を済ませたらすぐに部屋に戻るから、ほとんど引きこもりのような生活をしている。

教科書なんて夏休みに入ってから一度も開いておらず、成績は二年生になってから下降の一途を

辿っている。入学当初は学年順位が一桁だったが、二年生一学期の期末テストの順位は後ろから数えた方が早かった。

その惨状に母は酷く怒っていたけれど、春華は『かまうものか』と聞き直っていた。

どうせ必死に勉強したところで、自分はいきたい大学には行けない。春華の第一志望は共学だが、母は高校一貫校の女子大に進学するようにと常々言っている。

(勉強するだけ無駄なもの)

そう投げやりになっていた春華だが、母は違った。

それを知ったのはその日の午後。突然、母に呼ばれたのだ。

「最近のあなたはだらけすぎよ。家庭教師の先生をお呼びしたから、今から客間にいらつしやい」家庭教師を呼ぶなんて聞いていない、と訴えても無駄で、母は「お待たせしてはいけないでしょう」と促すばかりで取り付く島もない。

かといって、自分のために来てくれたという客人を放置することもできなくて、春華は急かされるまま客間に向かった。すると――

「春華」

不動聡が、そこにいた。

春華が聡と初めて顔を合わせたのは、中学生の頃に父に連れられて会社同士の集まりに参加したときだ。

不動旅行企画は野木製菓の主要取引先のひとつで、不動夫人と春華の母が学生時代の友人という

こともあり、顔を合わせる機会がたびたびあった。とはいえ、聡とは個人的に連絡を取り合うような仲ではなかったはずだ。それなのにどうして――

「聡さんなら、私も安心してあなたを任せられるわ」

驚きのあまりその場に立ち尽くす春華をよそに、母は聡が最高学府に通う優秀な人間であること、友人でもある彼の母親に頼んで家庭教師を依頼したことを揚々と語る。

一方、手放しに褒められた聡は苦笑しつつも春華に微笑んだ。

「そういうわけで、今日から君の家庭教師を務めることになった。よろしくな」

彼と過ごしたひと夏は、春華を変えた。

「母親を理由に勉強しないで後々後悔するのは春華だ。自分から馬鹿になってどうする？ 余計な口実を与えないためにも勉強するんだよ」

母の過干渉を理由に怠ける春華に、聡は活を入れた。

「我慢するなどは言わない。でも、俺の前でくらい弱音を吐けよ。春華は笑ってる顔が一番可愛いんだから」

彼は春華の心を救ってくれた。共に過ごした時間はたったの一か月だったけれど、たくさんのお話を春華に教えてくれた。

でも、聡が与えたのは甘い気持ちだけではなかった。

好きな人が自分を見てくれないもどかしさも、他の女性に対する嫉妬心も、どうしようもなく触

りたいのに、それができない悔しさも。教えたのは、全て彼だった。

週に三日訪れる聡からは、ときどき甘い香水の香りがした。

彼にはまるで似合わない人工的な匂いの陰で、顔も知らない女の存在がちらついた。

そのたびに春華は激しい嫉妬に襲われた。少しでも彼に追いつきたくて、名前も顔も知らない女に負けたくなくて、勉強を頑張った。化粧を覚えてお洒落<sup>しゃれ</sup>をして、精一杯背伸びをした。

『可愛い』

『綺麗』

そう言われたかったのだ。そしてその願いは、夏の終わりに叶った。

聡は、春華を生まれて初めての花火大会に連れて行ってくれた。浴衣を着た春華を見た彼は、とても嬉しそうに微笑んだ。

「へえ……だいぶ雰囲気が変わるな。その浴衣も髪も本当に似合ってる。すごく可愛い」

お世辞だとわかっていた。それでも心の底から嬉しかった。

だがそれはすぐに落胆に変わった。

まさに花火が始まるうというそのとき、ひとりの女性が彼を見つけて駆け寄ってきたのだ。

親しそうに彼に話しかけるその人からは、たまに彼から香るのと同じ甘い香水の匂いがした。

恋人のようには見えない。でも、男女の仲なのは聞かずともわかった。

……耐えられなかった。

自分史上最高に可愛いと思った浴衣姿が、途端に色褪せて見えた。それは女性も同様だったのだ

ろう。彼女は春華を見て鼻で笑った。その瞬間、負けたと思った。

「この子、聡の妹さん？　でも顔が似てないか。まさか付き合ってる……なんてことないわよね。こんなに純粋そうな子をたぶらかしちゃダメよ。本気になったらどうするの？」

「春華とはそんな関係じゃない」

きっぱりと否定した彼は、女性と別れた後、苦笑しながら春華の髪を優しく撫でた。

「変なところを見せてごめん。俺が春華を女として見ることはないから、心配するな」

きつと、聡は異性経験のない春華を安心させるためにそう言ったのだろう。だが、それは春華の恋心を打ち砕くには十分すぎた。

女として見るなんてありえない——そう言われたような気がしたのだ。

そのときの春華にできたのは、虚勢を張ることだけだった。

「大丈夫です。私が聡さんを好きになることはありませんから」

作り笑顔と共に伝えると、聡は明らかに安心した顔を見せた。きつと春華のような子どもに言い寄られなくて済む、とても思ったのだろう。それこそが春華を何よりも傷つけたことを、彼はきつと知らない。

結局、聡が家庭教師をしたのは十七歳のひと夏だけだった。その後の春華は聡と会うこともなく、変わり映えのしない日々を……母に干渉される毎日を過ごした。

けれど、それから五年後、転機が訪れた。

大学四年生の十月。いつものように朝食の席に着いた春華は、母と目が合うなり身構えた。

母には、春華を見ると夫に対する愚痴や不満を漏らす癖がある。それが一言二言で終わることはまずない。蛇口を捻<sup>ひね</sup>るまで水が止まることがないように、延々と夫の悪口を言い続けるのだ。

今朝はどんな話を聞かされるのだろう。愚痴っぽい母とふたりきりの食事はただでさえ気を遣うのに、朝から気分の悪くなる言葉を浴びたくはない。家政婦の田中<sup>たなか</sup>が作ってくれた美味しい料理が台無しになってしまう。

そんなことを頭の片隅で考える春華のことなど知るよしもなく、箸を置いた母は切り出した。

「春華。あなた、私に黙って就職活動をしていたそうね。しかも内定も出ていたというじゃない」  
半年間ひた隠しにしてきたことを指摘されて、春華は息を呑んだ。

「……どうして、それを知ってるの」

心臓がバクバクと嫌な音を立てるのを感じながら、春華は声を絞り出す。母はそんな娘を冷ややかに見据えた。

「最近、様子がおかしいから調べさせたの」

調べさせた？

春華が耳を疑う中、母は顔色ひとつ変えずに淡々と続ける。

「驚いたわ。勝手に就職活動をしていただけでも信じられないのに、よりによって内定先が無名の出版社だなんて」

驚愕と混乱で二の句が継がないでいた春華だが、母のこの言葉で我に返った。



(無名の出版社?)

微かに怒りの感情が心に宿る。

「……秘密にしていたことはごめんなさい。謝ります。でも、無名の出版社じゃないわ」

「一度も聞いたことがない会社だったけど」

「海外の絵本や児童書を主に出版している会社なの。一般的には知名度の低い会社かもしれないけど、五十年以上の歴史があつて、ベストセラーだつて何冊も出しているし——」

「興味ないわ」

春華が必死に説明するが、母は聞く価値もないと言わんばかりに遮った。

「なんにしても、もうあなたには関係のない会社よ。昨日、内定辞退の連絡をしておいたから」  
辞退?

(何を言ってるの?)

頭の中が真っ白になる。しかし、対面の母が得意げな笑みを浮かべているのに気づいた瞬間、激しい感情が心の内側から一気に沸き上がった。視界が赤く染まるような感覚がする。

人は、許容範囲を超える怒りを感じると怒鳴ることもできないのだと初めて知った。しかし、顔を真っ青にしてきつく拳を握る娘の前に、母は眉ひとつ動かさない。

「親に隠れて就職活動なんてするのがいけないのよ。お母さんは、春華が働きたがつているなんて知らなかったわ」

「言ったら反対したでしょう!」

ダメだ。声を荒らげてでもなんの意味もない。そうわかっているのに感情が制御できない。

「私が働きたいと言ったらお母さんは絶対に反対する、だから隠れて就活するしかなかったの!」

「そんなことないわ。お母さんが決めた会社なら賛成したわよ」

母は聞き分けのない子どもに言い聞かせるような口調で言い、呆れた顔をする。見下しているのが明らかな態度に、それまで堪えていた我慢の糸がぷつんと切れたのを自覚した。

『「お母さんが決めた会社」?」

「そうよ」

堂々と頷く姿に吐き気さえも感じた。

「春華は働かなくていいの。ずっとこの家にいればいいのよ。どうしても働きたいと言うのなら、お父さんの会社で働きなさい。わざわざ得体の知れない出版社を選ぶ必要はないわ」

「だから……!」

たまらず春華は立ち上がった。その勢いで椅子が大きな音を立ててひっくり返り、キッチンから家政婦の田中が慌てて飛んでくる。

「座りなさい。食事中なのにお行儀が悪いわよ」

窘められるといっそう苛立ちが募った。なぜ、どうして、こうも話を通じないのだろう。目の前にいるのは血を分けた実母なのに、まるで宇宙人と会話しているようだ。

この感覚を味わうのはこれが初めてではなかった。子どもの頃から何十回、何百回と数えられないほど経験してきた。そのたびに春華は言い返したくなる気持ちをグッと抑えた。でも、今回ばかり

りはとても黙って受け入れられない。

「お母さんは、いつもそう」

泣きたくない。それなのに声は震えてしまう。

「習い事も、友達も、学校も、自分の思い通りにして、私の意見を聞いてくれたことなんてないじゃない！」

春華はその現状から脱したくて秘密裏に就職活動をしてきた。そうして念願叶って憧れの出版社の内定を勝ち取った。それを勝手に辞退の連絡をしただなんて許せるはずがない。

「……のよ」

ぼつりと呟く。

「何？ 聞こえないわ」

「そうやって自分のことばかり考えているから、お父さんに不倫なんてされるのよ！」

「春華っ！」

それまで余裕を保っていた母の顔色が変わった。この瞬間、春華は自分が母の逆鱗に触れたことを自覚した。その証拠に母は眉を吊り上げ、真つ赤な顔で春華を睨んでいる。

絶対に言うてはいけない言葉だとわかっていて。だから十年以上口には出さずにいたけれど、限界だった。

視線が絡み合うこと数秒。先に視線を逸らしたのは母の方だった。

「……朝から大きな声を出さないで。頭が痛くなるわ」

母は、鬱陶しそうにため息をつくど静かに席を立つ。

「逃げるの!？」

「違うわ。話にならないから出ていくの。とにかく、お母さんはそんな得体の知れない出版社で働くことは許しません。あなたも少し頭を冷やさない。——田中さん、お料理を下げてくださる？ 食欲がなくなったの。せっかく作ってくれたのにごめんなさいね」

母は田中に声をかけ、春華には一瞥もくれないことなく食堂を後にした。

その場に残されたのは立ち尽くす春華と、オロオロする田中だけ。春華は母を呼び止めることはしなかった。しても無駄なのは、もう十分すぎるほどわかっていたから。

「お嬢様……」

気遣わしげな田中に話しかけられて、春華は泣きたい気持ちにグツと堪えて席に着く。

「騒いでごめんなさい。朝ご飯、いただきますね」

「無理に召し上がらなくても——」

「無理なんてしてないわ。田中さんのご飯を残すなんてもったいないもの」

春華は小さく笑い、静かに朝食を食べ始めた。白いご飯と味噌汁、煮魚におひたし、フルーツ。見た目にも美味しいそれを食べていく。そうして米粒ひとつ残さずに朝食を終えると、「ごちそうさま」と笑顔で礼を言つて食堂を後にした。

でも、ここまでだった。

「なんです……!」